

永
六
輔

話
聞
す
く
冥
利
冥
利

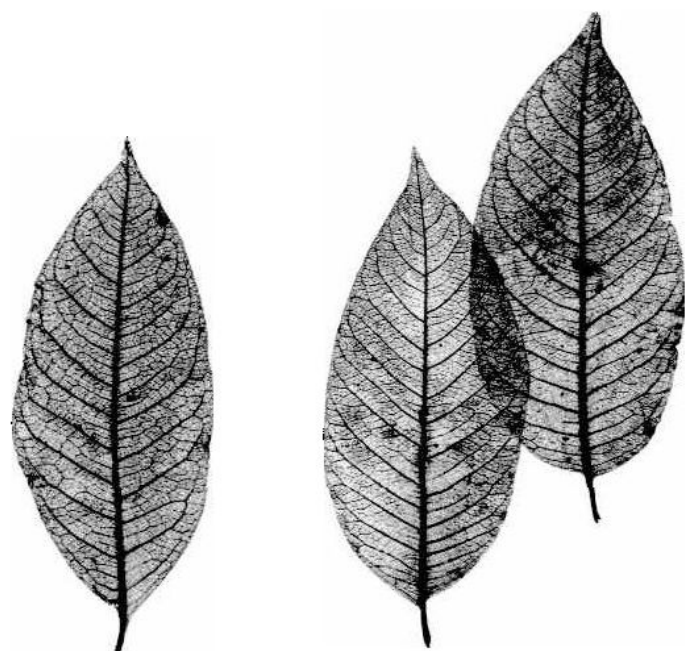
み
よ
う
り

み
よ
う
り



知恵の森文庫


知恵の森文庫



はな みょうり き みょうり
話す冥利、聞く冥利
えい ろくすけ
永 六輔

2005年9月15日 初版1刷発行

発行者—古谷俊勝

印刷所—萩原印刷

製本所—榎本製本

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8282

販売部(03)5395-8114

業務部(03)5395-8125

© rokusuke EI 2005

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-78385-6 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

話す冥利、聞く冥利

永 六輔

光文社

この作品は知恵の森文庫のために書下ろされました。

まえがき

僕の肩書を自分で書く時は「ラジオタレント」と書いている。

おまかせしますというと「作家」「随筆家」「放送作家」「司会者」「歌手」などなど、自分が何だかわからないほどの肩書がついてくる。

自称は「ラジオタレント」というわけで、「誰かとどこかで」「土曜ワイドラジオTOKYO」四十年近い長寿番組として語り続けている。

ラジオ以外にも各地の講演の言葉も含まれ、語りながら、この言葉は活字にするとどうなるかなと気にしている時があり、それが、この本をまとめる理由である。

文章の中に放送のスタッフや、パートナーの名前も登場するが、ラジオを聞いて下さる気分で、お読み下さい。

永 六輔

●目次●

まえがき

.....

3

第一章

霞かすみ

.....

7

第二章

雲

.....

47

第三章

雷

.....

79

第四章 霧

113

第五章 雪

135

第六章 霽もや

159

あとがき

195

第一章 霞

春だから頭が霞かすんだようになって、と言いつくすのじゃありませんが、最近脳に自信がない。そこで「脳を鍛えるために、新聞や本の音読をしましょう」という新しい説に関心が向きます。そこで張り切って音読しようとする、今度は目がかすむ、字が見えない。そこで白内障の手術をしました。おかげではつきり見えるようになって、いろいろなことに腹が立つ。困ったものです。



「その昔 座れば牡丹 いま立てず」

私の川柳のような俳句です。立てば芍薬しやくやく、座れば牡丹はたん、歩く姿は百合の花、という美しい女性の佇たたずまいを誉める文句がありました。最近、車椅子を使って外出する高齢の女性が多くなりました。牡丹のままで歩いていきます。



大阪の桂米朝師匠^{かつらべいちよう}。毎朝、新聞は一面の政治面から読んでいます。

「偉いですねえ」と話しかけたら、「違いまんねや、私のことかいなと思うて」と。師匠が指差した先には「米朝関係悪化か？」の見出しが。

米朝という字は、新聞のニュースなどではアメリカと北朝鮮のことを指しますね。米朝関係というと桂米朝さんが誰かと関係したという話ではなくて、二国間の外交のこと。米朝問題はいまならさしづめ核兵器のことでしょうか。でも、桂米朝さんは気になって気になって、新聞に「米朝」の字があると必ずその記事を全部読んでしまうそうです。

僕もあります。東京の西多摩では、高尾山にトンネルを通すことに反対しているグループがあります。僕も反対。

永六輔の本名は、永孝雄といいます。子どもの頃から、「孝雄さん、孝雄さん」と

呼ばれてきました。結婚して子どもができてからは、娘たちが父親のことを「孝雄さん、孝雄さん」と呼んでいます。だからタカオサンと聞くと、ドキツとするのです。タカオサンとは私のこと。守りたい！ タカオサンの自然を！ タカオサンの中腹に穴を開けるなんて、許さない。



へええ！ なるほど、そうだったのか！ と驚かされることは喜びでもあります。たとえばこんな話を聞きました。ちよつと前までは大漁旗たいりょうきというものがありません。漁に出た漁船が帰港するときに誇らしげに海風にひるがえ翻す、大きな旗。大漁、と染め抜かれ、漁船の名前も太く大きく染められた、見事な旗です。

その大漁旗が漁港へいっても、あまり見られなくなりました。漁業の後継ぎがいなくなり、漁船も漁獲量も減る一方。そのせいで困ったのが大漁旗を染めていた染物屋さん、縫っていた旗屋さん。

ところが、そこへ登場した救いの神こそJリーグ。プロ・サッカーの人氣がたちまち盛りあがって、応援旗の注文がくるようになったのだそう。おかげで染めも縫製も息をつくことができました。サッカー・ファンは「オレー」「オレー」と、やかましいだけじゃないんだ。伝統の技を救うこともあるのだから、少し優しい視線で見えてあげたい。



「ちぐらまぐら、する」という言葉を、聞いたことありませんか？ これは実は東京の方言なんです。「葛西弁^{かさい}」という、東京でも東の方の千葉県に近い地域の言葉。東京湾で漁業をしていた漁師たちの言葉から変化して、葛西弁がうまれたそうです。

ちぐらまぐら（あるいは、途中にンを加えて、チングラマングラと発音する人も）とは、ブラブラ、ウロウロすること。働かないでぶらぶらしている若者に批判がましく「ちぐらまぐらするな！」と叱ったりする。すごく雰囲気、出ている言葉ですね。

やっぱり方言には力がある！

この葛西弁という東京弁を研究するグループが地元にあつて、ざっと三九〇種類の葛西弁を収集したそうです。方言でしか伝えられないことも多いはずだから。



毎年、同じことを「不思議だなあ」と思っている。たとえば箱根駅伝。テレビで実況中継するアナウンサーは、なぜあんなに選手の家族の話をするのだろうか？

「〇〇選手のお姉さんは来月、出産です」「△△選手のお母さんは入院中だそうです……」

ここまで個人情報を出してしまう大学陸上部も、ちょっとおかしい。気をつけて聞いていると、レースの状況がほぼ固定してしまつて、競り合いがなくなると、「お姉さんが」「双子の姪めいが」と家族の出番になる。他に描写することがないから、できるだけ集めてきた個人情報を、言ってしまうのだろう。それにしても、家族の話ばかり

聞かされて、ちつとも面白くないのですが。

○

春になるとお花見に欠かせないのが、ブルーのビニールシート。どこの団体でも花見の席というと、このブルーのシートを使って座敷を作る。空に広がる桜色の花のかたまりに対して、地面にはブルーのシート。すごく変じゃありませんか？

「そうですよね、だってあのブルーシートは、事件現場の色ですから」

と言ったのは僕の敬愛するテレビの司会者・小倉智昭さん。おぐらともあき何か凶悪事件が起きた

とき、事件現場をすっぽり包んでテレビカメラや新聞記者の目から遮断するため、大きなブルーシートが使われる。現場保存やプライバシーの保護が目的とは言っても、隠すために使われるのがこのシート。そのシートと花見の席と同じ色でいいのだからか。

その小倉さんに番組に出てもらった。ゆかりの場所を歩いてもらい、そこで話を聞くとというコーナー。本番になってスタジオから呼びかけるといきなり、「いやー、本番で目の前にテレビカメラがないっていうのは、何十年ぶりでしょう。久しぶりです。何だか変な感じがしますよ」と言われました。

小倉さんがこれほどカメラに馴染んだわけは、フジテレビの『とくダネー』という毎朝やっているニュースと情報の番組のせいだ。この番組の冒頭、オープニングといわれる部分で小倉さんの一言が毎朝光っている。事件や事故についてのふとした感想、怒り、共感、驚きなどが誠実に小気味よく語られる。ときには「そこまで言って大丈夫？」と心配になるほどのことも。それでもハッキリ言う。テレビというメディアもまだ大丈夫だな、と思えるのはこういうテレビマンがいてくれるから。

小倉アナが放送局に入ろうと思ったきっかけは、大学時代に陸上部にいたころ、府中競馬場でトレーニングをよくやっていた。そのとき競走馬を見かけて「あ、かわいいな」と思ったから。「競馬中継をやるテレビ局のアナウンサー試験があつたんです

よ」。馬に惹かれてテレビ界に入った。でもギャンブルは大嫌いだったとか。

小倉さんに「永さんは競馬なんてやらないでしょう」と言われたけれど、たまにやります。

むかし、武智鉄二さんたけちてつじに言われました。「独りになって寂しくなったら、競馬をやりなさい」って。だからいま、やっています。



精神科医の北山修さんきたやまおさむ。僕の主治医でもあります。話をするだけで診察になります。彼の一言一言はありがたくもあり、救いでもある。

桜の季節にスタジオにやってきた主治医は、こう言っただけのけました。

「桜は人生のかなさを教えてくれます」と。

そんなこと、兼好法師けんこうほうしも言っているでしょ、と口から出かかって次の言葉に納得し